

効果的な ICT 活用実践研究校 藤江小学校 2学期のまとめ
 第3学年音楽科
 題材名 いろいろな音のひびきをかんとろう

〈授業者の疑問〉



PLAN

(教材研究→学びづくり案)

〈講師を招いてのICT研修〉

音楽アプリを活用すると、タブレット上で様々な楽器の音色を聞き比べたり、その音色を組み合わせて音楽をつくったりすることができます。

ICTは、未来を生きる子ども達の新しい学びを支える重要な学習環境です。そして、これからの学校音楽科教育においてもICT機器を活用することは、学びの選択肢を広げ、個別最適な学びの促進と協働的な学びの充実させることにつながります。しかし、音楽科の「本質」に迫る学びの「目的」には、何ら変わりはありません。ですから、ICTの活用は目的ではなく、あくまで「学ぶための手段」であることは念頭に置かなくてはなりません。

音楽科の授業において、「本物の楽器の音色や響きに触れる」ことは大事ですが、音や音楽のイメージを広げる仮想楽器として活用し、本物とアプリの音との比較を通して、本物の楽器の良さをすることもできます。



講師 小梨 貴弘先生
 (埼玉県戸田市立戸田東小学校教諭,
 東邦音楽大学非常勤講師)

音楽アプリ「カトカトーン」を使うと、音楽室にない楽器の音色も聞けるね。5年生の音楽の旋律づくりにも使えそう。

この題材で身に付ける力が明確にならないと、ICTの活用方法が決められないね。

音楽科の目標を達成するためにICTを活用するんだね。





音楽づくりの授業で、子どもたちが思いや意図を持って、自分のイメージに合う音の発想を得ることができるようにしたい！ そのためには、どのように授業をつくってあげればいいのだろうか？

〈校内で協議〉



学習指導要領や教科書にはどのように示してあるのか確認しよう。

他の教科と同じように、音楽も教材（題材）でつけるべき力が明確にあり、教科書に示されている！



教科書に、題材のねらい、学習目標、活動内容、音楽を形づくっている要素が教科書に示されているから、これを参考に、授業づくりをすればいいね。

つくりたい音楽についてイメージをしっかり膨らませてから、楽器に触れさせたいな。まずは、言葉や絵で表してみよう。
でも、いくら音のイメージを言葉で表現させても、実際の音とかけ離れているのではないかな。ここにICTを活用できないかな・・・。



授業者



学びづくり案で具現化



（授業実践）

【授業のポイント】

自分のイメージに合う音と実際の音を近づけるために、ICTを活用した疑似体験を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ音との対話をしっかり体験して楽しむ。

【題材（単元）の内容が身に付いた子どもの姿】

音楽を形づくっている要素の音色・リズム・旋律・音の重なり・反復に着目し、音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽を聴いたり歌を歌ったり楽器を演奏したり音楽をつくったりする姿。

【効果的なICT活用】

- ・どんな音楽をつくりたいのかイメージした後、音楽アプリ「カトカトーン」を使うことで、自分のイメージに合う音を探すことができる。
- ・音楽づくりの楽器を選ぶ際に、アプリでたくさんの音を聴いたり試したりしながら、自分のイメージに合う音と実際の楽器の音とを結び付けることができる。



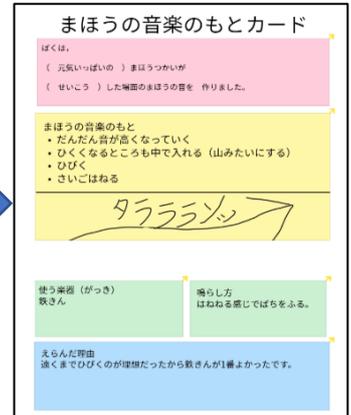
授業者

本時の学習活動

「おかしなすきなまほうつかいがつかう『まほうの音楽のもと』をつくろう」

音楽の設計図づくり

1. 「おかしなすきなまほうつかい」を歌い、曲の感じや歌詞を基に、自分の表現したいまほうつかいを絵や言葉で表しながらイメージを持つ。
2. 自分がイメージしたまほうつかいの「まほうの音楽のもと」を音色やリズムなどを考え、言葉や図で表す。



即興的な表現活動

3. 言葉や図で表した「まほうの音楽のもと」の音のイメージを、音楽アプリ「カトカトーン」で音に変換して表現する。
4. 「カトカトーン」で選んだ音を基に、自分のイメージに合う音(楽器)を見つける。



失敗してショックを受けているガガガーンっていう感じに合う音は・・・。

たたくばちを変えたらどうかな。やわらかいマレットだと・・・。



鉄琴の音は明るい感じがするな。高さを変えてみたらどうなるかな。



感受活動

5. つくった「まほうの音楽のもと」を発表し合い、友達の表現の良い点について伝え合い、音楽づくりの新たな発想を得る。



遠くまでびびくようにしたかったから鉄琴に決めたよ。

わたしのイメージは、ちょっとドジなまほう使いだから失敗する場面でも明るい音を選んだよ。



次時へおむけて

6. 自分や友達の「まほうの音楽のもと」を聴いて感じたことや気付いたことを整理する。
7. タブレットで録音して、次時のグループでの音楽づくりに生かせるようにする。

【児童のふり返りより】

- ・ぼくは、友達の音をきいて、しっぱいした場面の音は暗いと思っていただけど、明るい感じにしているすごいと思った。
- ・わたしは、しっぱいした場面の音をつくる時に、ピアノの高い音より低い音の方が合うなと思いました。次は、友達と音を組み合わせたいです。
- ・気が付いたことは、鉄きんを使うと明るい感じがすることです。次は、もっといい音楽をつくってみたいです。
- ・「カトカトーン」を使って音をさがすと、たくさんの音を早くためせて、どんな楽器にするといいか予想できるからべんりだなと思った。
- ・一つの音より音を重ねて鳴らすほうが自分のイメージした音に近づくと考えた。

Check

(分析・評価)

〈全体協議～ICTの活用が、児童の学びに効果的なものとなっていたか～〉

「カトカトーン」を使うといろいろな音を身近に聞くことができ、自分の音のイメージを持つことができているから、楽器選びがスムーズだったよ。

自分のイメージに合う音(楽器)を見つけるとき、意欲的に取り組んでいたね。「カトカトーン」の効果かな。

「カトカトーン」は、自分のイメージする音と楽器の音とを結びつける橋渡しのような役割をしているね。

だから、ばちの種類を変えるなどの奏法にまでこだわって音楽をつくるほうに深めていけたんじゃないかな。

子どもたちは、どのくらい音楽の見方・考え方を働かせていたかな。

でも少人数だから楽器が足りないということもないし、初めから楽器を使っても良かったのではないかな。

そこは、やはり教師の出番だね。音楽の要素と子どもたちのイメージを結び付け、板書や言葉掛けて意識づけることが必要だね。



Action

(改善・次の授業へつなぐ)

音楽科では、本題材での児童の姿のように「音にこだわる」ことを、他の題材でも意識してより良い音を求めていく。

ICTは自己表現や、考えを深めるための手段の一つであることを再確認し、他教科でも、ねらいを達成するために「いつ・どの場面で・どのように活用するのか」を意識して授業づくりをする。

そのために、教材研究をして何のために学ぶのかを明らかにするとともに、子どものつまずき等、実態を把握する。

